

## (20) 貝毒対策としての海底耕耘効果調査

### 予算

民間受託

### 概要

大阪湾東部海域（大阪府海域）では麻痺性貝毒原因プランクトンの増殖規模は全国的にも大きく、2006年には底曳き網漁業で重要な漁獲物であるアカガイで、2007年にはトリガイで初の毒化事例が確認された。近年では両種がほぼ毎年毒化するとともに毒化期間も長期化し、2018年には2月中旬から9月中旬まで半年以上出荷自主規制の措置が執られた。そのため、麻痺性貝毒による漁業被害を防止するための早急な対策が求められている。そこで、貝毒が発生する前（1月下旬～2月中旬）に海底に沈んでいる無毒な珪藻（プランクトン）を海底耕耘により巻き上げ・増殖させ、競合によって貝毒原因プランクトンの増加を抑制することが可能か検証した。堺市および岸和田市沖において2022年1月25日から2月12日に計4回実施された海底耕耘の当日と数日後に調査を行った。CTDによる観測では、海底上1-2 mの範囲で濁度の上昇が見られ、少なくともこの範囲には底泥が巻き上げられていると考えられた。2022年春季の海域における *Alexandrium catenella* の増殖は低レベルで推移し、二枚貝の毒化は確認されなかった。2022年の結果は昨年と同様に、貝毒対策として十分な効果を示したように見えるが、比較対象を設けることができないため、貝毒原因プランクトンの増殖抑制効果の評価を行うには、事例を重ねることが必要である。

### 担当者

辻村裕紀、中嶋昌紀、近藤 健